

仏教僧院を起源とする中庭型集住体の空間構成

－パタン旧市街地における共同的空間管理システムに関する研究 その1－

SPATIAL STRUCTURE OF COURTYARD STYLE SETTLEMENT ORIGINATED
FROM BUDDHIST MONASTERY

－ A study on co-operative space management system in old residential area of Patan city Part 1－

サキヤ ラタ*, 高田 光雄**, 神吉 紀世子***

Lata SHAKYA, Mitsuo TAKADA and Kiyoko KANKI

In this paper, the characteristics of the spatial structure of courtyard style settlement, Baha/Bahi, originated from Buddhist Monasteries are illustrated. Firstly, the transition process of Baha/Bahi from a learning place of celibate monks to ordinary residential place of non-celibate monks is clarified. Secondly, a framework to analyze spatial structure of present Baha/Bahi is developed through examining the relationship between courtyard's surrounding building and courtyard's accessibility which are extracted from spatial structure of typical Baha/Bahi. Lastly, the framework is applied to 65 numbers of Baha/Bahi in the Patan old residential area. As a result, twelve types of spatial structure are discovered and characteristics of major types are figured out.

Keywords: Courtyard, Settlement, Buddhist Monastery, Patan City, Nepal, Spatial Structure

中庭, 集住体, 仏教僧院, パタン市, ネパール, 空間構成

1. はじめに

1.1. 研究の背景と目的

ネパールの首都圏であるカトマンズ盆地は、近年都市化が著しく進行している^{注1)}。盆地内には、1769年のネパール統一以前にネワール族の小国として発展していたカトマンズ、パタン、バクタプルという3つの都市が存在する。これらの3都市の旧市街地^{注2)}(図1)にはいずれも仏教僧院が存在し、各都市の旧市街地は、仏教都市^{注3)}としての特徴とネワール族の住居としての特徴の両面を持っている。仏教僧院の典型的な建築様式は中庭型であり^{注4)}、ネワール族の住居は積層型住宅^{注5)}が一般的である。また旧市街地には複数の積層型住宅が中庭を囲んで建つ街区がよくみられる。中庭は、隣接する道路や他の中庭と建物の1階を通り抜ける細い通路によって結ばれている。本研究では、中庭とその中庭を囲む建物、およびそれらの連担したものを「中庭型集住体」と呼ぶものとする。

既往研究では、中世期にマッラ王宮や裕福な人々の邸宅が典型的な中庭型の仏教僧院にならって建設されたことが指摘されている^{注6)}。また、形態学的研究から、中庭型の街区が、仏教僧院を中心に発展してきたことが推測されている^{注7)}。これらのことから、上述の3都市の旧市街地全体は、仏教僧院を起源とする中庭型集住体であると捉えられる。

ネパールでは基本的に、中庭は道路などと同じく公的な土地(Public Land)とされているが、利用および日々の維持管理は周辺居住者が行うこととされている^{注8)}。一方で、中庭を囲む仏教僧院の建物や中庭に置かれる仏塔には、それぞれの伝統的な管理組織であるサンガやグティといった組織が存在し、維持管

理は同組織の構成員によって行われる^{注9)}。しかし、近年の都市化の進行により、管理組織と居住者の関係が希薄化するとともに、中庭や仏教僧院の建物の商業的利用や居住者の郊外への住み替えが増えつつある^{注10)}。すなわち、旧市街地の伝統的な共同的空間管理システムが都市化により変化しつつあると考えられ、現代に合致したシステムの再編が重要な課題である。

ネパールでは、仏教僧院はバハあるいはバヒ(以下、バハ・バヒ)と呼ばれる^{注11)}。旧市街地には、バハ・バヒの中庭以外の中庭も存在し、そういった中庭にも、チャイティア(Chaitya)^{注12)}と呼ばれる



図1 カトマンズ盆地の都市と旧市街地 (行政資料を元に筆者作成)

* 京都大学大学院工学研究科 博士後期課程・修士(学術)
日本学術振興会特別研究員 DC

** 京都大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)

*** 京都大学大学院工学研究科 准教授・博士(工学)

Graduate Student, Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., M. Ph.
Research Fellow of the JSPS (DC)
Prof., Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., Dr. Eng.
Assoc. Prof., Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., Dr. Eng.

仏塔が置かれていることが多い。中庭は、毎日の参拝を行う聖なる空間であるとともに、子供の遊び、談話、洗濯などにも利用される重要な生活空間でもある¹³⁾。一方で、バハ・バヒという名称を持っていても、仏教僧院としての利用が減少し、生活空間に変化している事例も見られる。そこで本稿では、現代に合致した共同的空間管理システムの再編に向けた基礎的な研究として、旧市街地に存在する中庭型集住体バハ・バヒの空間構成を明らかにする。

具体的には、まず宗教機能が中心であった仏教僧院としてのバハ・バヒから、現代の中庭型集住体としてのバハ・バヒに至るまでの経緯を整理する。次に、空間構成の類型化の方法を検討した上で、パタン旧市街地に位置するバハ・バヒの名称を持つ実際の中庭型集住体に適用し、その空間構成とその特性を明らかにする。パタン旧市街地にはバハ・バヒが166件存在し、カトマンズ市の106件、バクタプル市の23件と比較して多い¹⁴⁾。またパタン市は、カトマンズ市ほどには都市化が進行しておらず、都市化の影響を受けながら変化しつつある状況と考えられることから、対象地として選定した。

1.2. 既往研究と本研究の位置づけ

宗教空間としてのバハ・バヒに関する研究には、宗教行事や、運営組織であるサンガについての仏教学や歴史学からの研究が多く存在する。Hem Raj Shakya¹⁹⁾がその代表的な研究者であり、Hera Kaji Vajracharya²⁰⁾は特にパタン市のバハ・バヒを対象とした研究を行っている。また、Min Bahadur Shakya⁴⁾⁵⁾²¹⁾はチベットおよび中国で保存されている古代文献をネワール語と英語に翻訳し、中世の仏教学者の活動について詳しく研究している。John. K. Locke¹⁸⁾はカトマンズ盆地内のすべてのバハ・バヒの歴史、運営組織形態、行事などを詳しく考察している。David Gellner²²⁾はバハ・バヒの行事から仏教とヒンズー教を比較し、さらにバハ・バヒの変遷についても考察を行っている。また、Manik Ratna Shakya²³⁾はバハ・バヒの建設手法について歴史的文献に基づいて考察している。

一方、バハ・バヒを旧市街地の文化財 (Cultural Heritage) として取り上げた文献にはUNESCOとネパール政府²⁴⁾による歴史的建築目録があり、カトマンズ盆地内に存在するすべての寺院、仏塔と共にバハ・バヒの歴史、写真、配置図が掲載されている、貴重な資料となっている。また、Wolfgang Korn⁷⁾はカトマンズ盆地の伝統的建築の一つとしてバハ・バヒの建築様式を紹介しており、その建築的空間形態からバハ、バヒ、バハバヒという三つに類型化している。さらに、日本工業大学調査団²⁵⁾は老朽化したパタン市の1件のバヒの復原にあたり、復原前から完成までにわたって調査研究を行っている。また、バハとバヒを平面形式から四つに類型化しており、複数のバヒの建築的様相を調べている他、仏教僧院平面の変遷および王宮建築との関連について研究をしている¹⁰⁾。しかし、いずれも個人住宅が併設されているバハ・バヒを対象とした調査や考察は行われていない。

石井²⁶⁾は文化人類学の立場から、パタン旧市街地を、ネワール族の伝統的住宅や宗教的空間が多く含まれる聖なる集落として注目し、研究している。また、歴史的研究の中で古代期の土地制度とネワールの集住が関連していることはSharma²⁷⁾の著書から伺えるが、中庭型の集住という観点からの考察はみられない。

パントラ²⁸⁾は個人住宅が併設されているバハ・バヒである「Bu Baha」を対象に、その副僧院からなる地区の調査研究から、中庭型の街区には、バハの主僧院と副僧院の空間構造や関係性が決定的な

役割を担っていることを指摘している。また、中庭型の街区の寸法において一定のモジュールが使われている可能性についても指摘している¹²⁾。その他に、バハ・バヒが個人住宅化した事例研究は現地の建築雑誌で報告されているが、調査報告的なものにとどまっている²⁹⁾。

本研究ではバハ・バヒを宗教的および歴史的空間としてのみ捉えるのではなく、時間と共に変化を遂げてきた重要な居住空間として捉え、集住における共同利用・管理のあり方に関する知見を得るための基礎的研究として位置づける。また、バハ・バヒの保全においても宗教や歴史という観点だけではなく、居住空間という視点からも評価し、現代的意義を解明する研究としても位置づけられる。

1.3. 研究の方法

第2章では、仏教の歴史やバハ・バヒに関する文献調査を行い、聞き取り調査によって補足および確認を行った。第3章ではまず、原型に近い仏教僧院バハ・バヒの空間特性を文献に基づいて考察した上で、類型化の視点を整理する。第4章では上記の視点をを用いて、パタン旧市街地の対象事例の現地調査に基づいた類型化を行い、それぞれの特性について分析を行う。第5章では各章から得られた知見をまとめる。

なお、第3章の専門家へのヒアリングおよび第4章の現地調査は2008年4月、2009年6月と同年11月に行った。

2. 中庭型集住体バハ・バヒの変遷

バハ・バヒはサンスクリット語の“Vihar” (僧院) を意味するネワール語の言葉で、釈迦時代から出家僧侶の居住場として存在していたとされる。釈迦の没後は釈迦の存在を示すためチャイティアを中心に設け、僧侶部屋を周りに設けるようになったとされる¹⁵⁾。ネパールにおいては3世紀に初めてCha Bahiという僧院が建てられたとされる¹⁶⁾が、4世紀以前(リチャビ期)のネパールの歴史については物証不足のため不確実なものが多い。そのため本章でもリチャビ期以降の変化を扱う(図2)。

2.1. 4～12世紀までのバハ・バヒ

リチャビ期には15件以上のバハ・バヒが存在していたとされる。当時、バハ・バヒには政府からの援助が与えられており、国の重要な施設として扱われていた¹⁷⁾。僧侶たちはサンガ組織を通して自治権をもち、寄付された土地や僧院の管理なども行っていたと考えられている。8～12世紀は仏教の成長期といわれ、インドや中国から仏教学を学びに来る僧侶が増え、複数のバハ・バヒが創立されたとあるが、その殆どが出家僧侶用の僧院であったとされる¹⁸⁾。12世紀頃には出家僧侶のポストとして「サキヤ」、在家僧侶として「バジュラチャルヤ」が利用されるようになったとされている¹⁹⁾が、12世紀頃までのバハ・バヒは出家僧侶が主流の仏教学を学ぶ出家僧侶たちの専用の居住の場であったと考えられている²⁰⁾。

2.2. 13～15世紀までのバハ・バヒ

マッラ期の13世紀初期にはインドで仏教が迫害され、多くの学者がネパールに入り、仏教学の資料が一層増えることになる。14世紀のカーストの細分化において、僧侶ポストである「サキヤ」や「バジュラチャルヤ」も僧侶という職を持つカーストとして取り入れられることになり、異なるカーストから僧侶になることができなくなる²¹⁾。15世紀末までには出家僧侶が完全にいなくなり、修行を受けることのできるのはいずれもそれまでの僧侶の子孫に限定され、バハ・バヒ

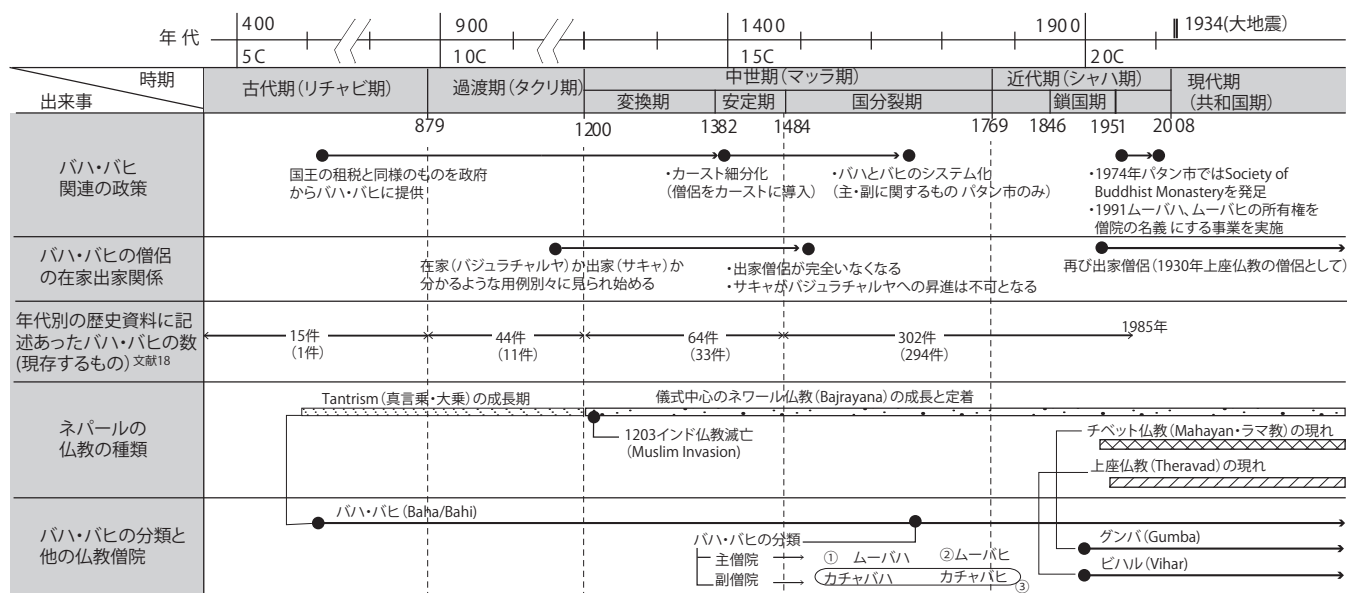


図2 カトマンズ盆地(旧ネパール)における仏教の歴史的背景と中庭型集住体「バハ・バヒ」の変遷 (文献調査をもとに筆者作成)

の運営組織であるサンガも、血縁関係による組織に変化する。また、修行も宗教的信仰とは関係がなくなり、子孫であれば自動的にチュダカルマ (Chudakarma) ^{注22)} という4日間の僧侶生活を送る儀式に変化した。この頃、在家僧侶による儀式中心とするネワール仏教として定着することになったといわれている ^{注23)}。

2.3. 16～18世紀までのバハ・バヒ

15世紀末以降、カトマンズ盆地は複数の小国に分裂し、それぞれ異なる改革が行われる。17世紀後半には、パタンにおいてバハ・バヒを主僧院と副僧院に分けるシステム化 ^{注24)} が行われた。それは修行を受ける儀式を行うバハ・バヒを主僧院としてムーバハ、ムーバヒと呼び、それ以外のものは各主僧院に対する副僧院としてカチャバハ、カチャバヒとするもので、カーストの固定化を一層深めることになった。それ以降に創立されるバハ・バヒは、信仰の篤い人々の個人的な所有物として、主僧院に所属する副僧院となった。これにより、バハ・バヒは① Maha Vihar (上級僧院)：一般修行を終え上級修行に励む在家僧侶の居住の場であるムーバハ、② Madhyama Vihar (中級僧院)：出家僧侶の居住の場であるムーバヒ、③ Samanya Vihar (普通僧院)：仏教を信仰する一般市民の居住の場であるカチャバハおよびカチャバヒ、と三つのレベルに分類されることになったと推測されている ^{注25)}。しかし、15世紀の時点で出家僧侶が存在していなかったため、ムーバヒは本来の僧院としての利用がなくなり、多くは仏教学や地域の小学校として利用された ^{注26)}。一方、僧侶職にはすでにヒンズー教の僧侶が存在するため、バジュラチャルヤはライフサイクル上の通過儀礼を担当する技術者になるが、サキヤは儀礼仏教から切り捨てられ新しい職につくようになった ^{注27)} という記述がある。

以上から、ムーバハおよびムーバヒは、学問中心の僧侶の居住の場から、儀式を行う僧侶や一般市民と同様の生活をする僧侶の居住、および地域活動の場へと変化したといえる。一方で、カチャバハの多くは初めから儀式の場ではなく、一般的な生活が中心の場であったといえる。17世紀以降はカチャバハが多く創立されていることから、バハ・バヒは僧侶生活よりも一般市民生活が中心の中庭型集住体として定着することになったと考えられる ^{注28)}。

2.4. 19世紀～現在までのバハ・バヒ

18世紀後半になると、複数の国に分かれていたネパールが非ネワール族のシャハ王朝により統一され、カトマンズ盆地が首都圏となった。それに伴いカトマンズ外からの移住者が増加する中、市民生活を行いつつ儀式のみを継承する僧侶からなるネワール仏教をもう一度見直す取り組みが始まる。1926年にはチベットで継承されていた学問中心の密教に関心をもち、チベット仏教の僧院グンバで出家僧侶になる人が現れる ^{注29)}。また、1930年には東南アジアに盛んであった上座仏教の出家僧侶となる人も現れ、43年には独自のサンガ組織(カーストとは無関係)を設立、44年には独自の僧院「ビハル」が建設される ^{注30)}。また、既存のムーバヒでも、一部を上座仏教の僧侶に無償で貸し出ししたり、または所有権を与えたりして、上座仏教の僧侶がムーバヒの運営や管理をする例もみられるようになる ^{注31)}。この時期からはバハ・バヒの新設が殆どなくなる ^{注32)} が、20世紀以降はビハルの建設が目立つようになる ^{注33)}。また、ガンダクティ部分のみを残し、その他の僧院所有の居住空間は私有化され、バハ・バヒの管理が行われなくなる例もみられるようになる。仏教僧院の消滅を懸念して、パタンでは1974年にSociety of Buddhist Monasteryが設立され、1991年にパタンのムーバハ、ムーバヒの所有権をサンガ構成員の名義からバハ・バヒ名義にする事業を成功させた。しかし、サンガ構成員が減少しているバハ・バヒの継承の課題は残ったままである ^{注34)}。

3. 仏教僧院としてのバハ・バヒの空間特性と中庭型集住体バハ・バヒの類型化の視点

本章では中庭型集住体バハ・バヒの空間特性の類型化のための視点を整理する。

3.1. 仏教僧院としての原型に近いバハ・バヒ

中世期にはバハ様式、バヒ様式として知られる、敷地決定や神室であるガンダクティの配置などの計画手法が確立したとされている ^{注35)}。現存するバハ・バヒの中で、中世期の計画手法に則った建設が行われているのがカトマンズのカチャバハである Chhusya

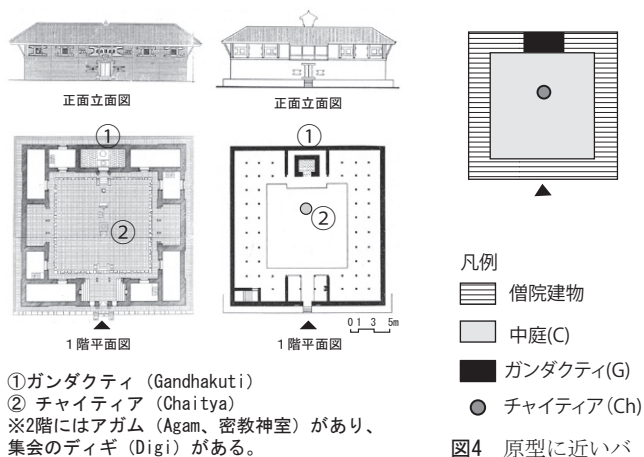


図3 原型に近いバハ・バヒの図面
(文献7から引用した図に筆者が数字を加えた)

Baha とパタンのムーバヒである Pintu Bahi とされる^{注36)} (図3)。両バハ・バヒは、2階建てで、一体型の建物が中庭を囲むように建っている。建物内の空間をみると、ガンダクティ (以下 G) が玄関から正面に位置し、密教の神室「アガム」(以下 A) は2階に位置する。集会室のディギ (以下 D) は A の外側に設けられ、そのほかの空間は多目的室や僧侶たちの居室であったと考えられている。各空間の中でも G が仏教僧院として重要な空間であるといわれる。また、中庭に置かれるチャイティア (以下 CH) も仏教僧院に必ず存在するものである。

以上から原型に近いバハ・バヒは G をもつ建物と CH をもつ中庭を基本構成とし、G をもつ建物には仏教僧院を成り立たせるための用途に必要な複数の空間が含まれていることがわかる (図4)。

3.2. 中庭型集住体バハ・バヒの類型化の視点

原型に近いバハ・バヒでは中庭と中庭を囲む建物すべてが仏教僧院として利用されていた。これに対し、現在のバハ・バヒには、①原型に近いもの、②G をもつ建物に付属する別の建物をもつもの、③G が中庭に配され、僧院ではなく一般的な住宅としての建物が中庭を囲むものがあることが示されている^{注37)}。中世期以来の原型に近いバハ・バヒの空間特性と比較して、現在のバハ・バヒをみた場合、

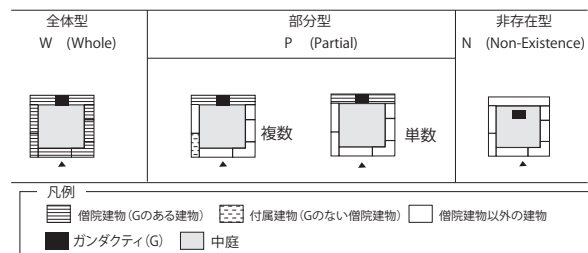


図5 中庭を囲む僧院建物の囲み形状からみた類型

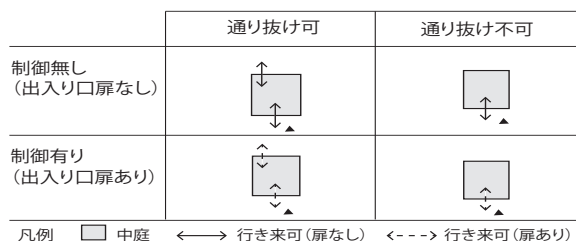


図6 中庭の通り抜け可否と制御の有無関係からみた類型

中庭とそれを囲む建物の囲み形状との関係が変化してきていると言える。

以上より、現在のバハ・バヒの空間特性において、中庭を囲む僧院建物の囲み形状の視点からみると図5のように①全体型②部分型③非存在型に分類することができる。

また、原型に近いバハ・バヒの出入り口には扉があり、時間帯によって出入りが制御されており、基本的に自由に通りぬけけるものではなかった。しかし、現在は複数の出入り口をもち、かつ出入り口に扉がなく、自由に通り抜けできる中庭が多く見られる。自由に通り抜けできる中庭は周辺の市街地と連続した市街地の一部となっており、独立した仏教僧院の中庭とは異なる性質をもっていると考えられる。よって、現在のバハ・バヒの空間特性においては通り抜け可否と制御の有無を類型化の一つの視点としてとらえ、図6のように①通り抜け可で制御無し②通り抜け可で制御有り③通り抜け不可で制御無し④通り抜け可で制御無しに分類することができる。

4. 対象とする中庭型集住体バハ・バヒの空間構成とその特性

本章では対象とする事例の現地調査を行い、3章で示した視点に基づいた、類型化とその特性の分析を行う。

4.1. 対象事例の概要

パタン旧市街地のバハ・バヒには、主僧院で上級のムーバハ 16 件、主僧院で中級のムーバヒ 21 件があり^{注38)}、副僧院で下級のカチャバハ 105 件とカチャバヒ 10 件、その他 14 件で、合計 166 件のバハ・バヒが存在する。このうち、まず、僧院として原型に近いバハ・バヒの空間特性を比較よく残していると思われるすべてのムーバハ (BA)、ムーバヒ (BI) を分析対象として選定する。また、これらの空間特性と比較するために、ガチャバハ (KB) 28 件も分析対象として選定する。図7はパタン旧市街地における対象バハ・バヒの分布を示す。

4.2. 対象事例の類型化

通り抜けの可否については現地調査によって確認し、中庭に対する僧院建物の囲み形状、および制御の有無については周辺居住者への聞き取り調査によって確認した。対象事例の僧院建物の囲み形状

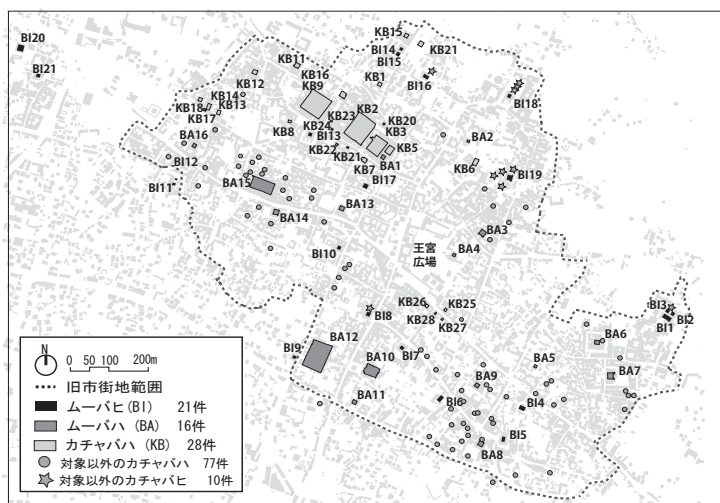


図7 パタン旧市街地における中庭型集住体「バハ・バヒ」の分布
(ネパール国政、Dep. of Urban Development & Building Construction から入手したDigital Base Mapに文献18と文献24を参考にして筆者がバハ・バヒの位置を記入した)

について、2つの中庭に挟まれた建物がある場合は、その建物の主要な出入口の位置によって、どちらの中庭に属する建物であるかを判断した。通り抜けは中庭に2つ以上の出入口がある場合を可と判断した。また、出入口に扉があり、時間帯によって制御がされているものを制御有りと判断した。表1および図8にその結果を示す。

なお、対象事例のうち、2件の仏教僧院バハ・バヒが同一中庭に位置するという特殊なケース(事例36、37と事例56、57)が2箇所みられ、それらの事例を分析の対象外とし、計61件について分析を行う。

僧院建物の囲み形状については、対象事例61件のバハ・バヒのうち、16件が全体型で、9件が部分型・複数、28件が部分型・単数、8件が非存在型であり、部分型が多く存在することが分かった。また、全体型や部分型・複数は主僧院のBAとBIで構成され、非存在型は

表1 対象事例の属性一覧

S. no.	バハ・バヒの名前		記録のある最初の年 (Nepal Era)	中庭の広さ		中庭を囲む僧院建物	中庭		類型化
				面積	m×m		通りぬけ可否	制御有無	
1	Kwa Baha	BA1	165	106	10.7×9.9	全体	可	*	ア
2	Uku Baha	BA8	239	159	12.4×12.8			*	
3	Guji Baha	BA9	373	100	9.6×10.4			*	
4	Ha Baha	BA14	262	178	13.4×13.3			*	
5	Jyaba Baha	BI7	772	99	9.4×10.5			*	
6	Iba Baha	BI8	537	196	14.7×13.3			*	
7	Ikchache Baha, Pintu	BI14	511	71	8.5×8.4			*	
8	Konti Baha	BI16	743	145	9.8×14.8			*	
9	I Baha	BI18	470	104	9.4×11.1			*	
10	Chika Baha	BI19	535	209	14.0×14.9			*	
11	Ilaaye Baha	BI4	不明	164	11.0×14.9		不可	*	イ
12	Kinu Baha	BI9	539	70	8.7×8.1			*	
13	Nhyaka Baha	BI10	727	95	9.4×10.1			*	
14	Na Baha	BI13	778	97	9.9×9.8			*	
15	Ikchache Baha, Dantu	BI15	不明	不明	不明			*	
16	Pucho Baha, Chwathu	BI20	372	197	13.7×14.4			*	
17	Wam Baha	BA3	561	243	15.9×15.3	部分・単数	可	*	ウ
18	Jyo Baha	BA4	不明	71	8.5×8.3			*	
19	Ta Baha	BA12	547	4282	79.0×54.2			*	
20	Bu Baha	BA15	547	1840	58.6×31.4			*	
21	Guita Baha, Mula	BI1	144	293	12.4×23.6			*	
22	Guita Baha, Tadhagu	BI2	144	92	10.0×9.2			*	
23	Guita Baha, Chidhagu	BI3	144	91	10.2×8.9			*	
24	Dhapaga Baha	BI17	795	165	13.2×12.5			*	
25	Tanga Baha	BA10	245	1012	35.5×28.5			*	
26	Nag Baha	KB2	577	3865	69.9×55.3	部分・複数	不可	*	カ
27	Aki Baha	KB10	656	不明	不明			*	
28	Mikha Baha	KB12	832	164	12.9×12.7			*	
29	Yekachhen Baha	KB19	**1969	不明	不明			*	
30	Dhum Baha	BA3	805	48	7.1×6.8			*	
31	Yachu Baha	BA5	744	不明	不明			*	
32	Su Baha	BA6	182	126	12.1×10.4			*	
33	Bhinchhe Baha	BA7	550	305	16.4×18.6			*	
34	Cuka Baha	BA11	780	107	10.3×10.4			*	
35	Si Baha	BA16	509	86	9.0×9.6			*	
36	Michu Baha	KB3	※807	1720	46.6×36.9			*	
37	Baidhya Baha	KB4	不明	1720	46.6×36.9			*	
38	Nhu Baha	KB7	457	112	10.1×11.1			*	
39	Bahacha	KB17	779	23	4.5×5.2			*	
40	Harsa Baha	KB26	※977	58	7.5×7.7			*	
41	Kwalim Baha	KB6	不明	不明	不明			*	
42	Dau Baha	BA13	706	131	12.0×10.9			*	
43	Ubaha Baha	BI5	511	120	8.6×14.0			*	
44	Thapa Baha	BI6	**1911	不明	不明			*	
45	Khwaye Baha, Tadhagu	BI11	734	不明	不明			*	
46	Khwaye Baha, Chidhagu	BI12	不明	不明	不明			*	
47	Pucho Baha, Kwathu	BI21	672	103	10.8×9.5			*	
48	Ikchachhen Baha	KB1	535	107	10.3×10.4			*	
49	Atha Baha	KB8	842	66	7.5×8.8			*	
50	Yata Baha	KB11	814	174	13.4×13.0			*	
51	Mu Baha	KB13	567	146	12.5×11.7			*	
52	Chhaye Baha	KB14	787	116	9.6×12.1			*	
53	Ana Baha	KB15	535	105	10.7×10.1			*	
54	Mati Baha	KB23	**1934	22	4.1×5.3			*	
55	Triratna Sim Baha	KB25	974	42	7.4×5.7			*	
56	Nyakhachuka	KB9	520	3582	60.5×59.2	非存在	可	*	コ
57	Unaca Bhajubal Baha	KB16	不明	3582	60.5×59.2			*	
58	Ganesa Baha	KB18	1054	149	16.4×9.1			*	
59	Chaadwa—Bakunani	KB28	1065	不明	不明			*	
60	Sasu Nani	KB5	845	377	16.6×22.7			*	
61	Kuti Baha	KB20	930	24	5.2×4.6			*	
62	Khachhen Baha	KB21	**20世紀	不明	不明			*	
63	Thyaka Baha	KB22	※920	32	6.8×4.7			*	
64	Mati Bahacha	KB24	983	不明	不明			*	
65	Dhandya Baha	KB27	1006	不明	不明			*	

「記録のある最初の年」は文献を基に参考情報として記載している。：※のついているものは文献(24)によるものであり、それ以外は文献(18)によるものである。また、年代は西暦879年10月に始まるNepal Era (NS ネパール世紀)で記述しているが、**のついているものは西暦である。

中庭の広さについて：データはネパール国政Dep. Of Survey のデジタルベースマップにより寸法を測った。「不明」は中庭を囲まれる建物が崩れ、空き地になっていることや建替えにより中庭の範囲を特定できないもの

*：夜間制御、それ以外は用事あるとき外開鎖

副僧院のKBだけで構成されるに対して、部分型・単数にはBA, BI, KB全種類がみられた。

中庭の通り抜け可否と制御の有無においては、対象事例61件のうち、35件が通り抜けのできる中庭であり、周辺の市街地と連続した中庭が多いことを示している。一方、制御のあるものが52件あり、通り抜け可や不可に関わらず、制御有りが多いことが明らかになった。

図9はア～シの空間構成タイプごとに該当する中庭の面積をプロットしたものである。タイプアとイは70～200㎡の間に分布しており、これはBAとBIによって構成される全体型であるためだと考えられる。一方、約4000㎡の大規模な中庭をもつ事例no. 19、26は、通り抜けが可で制御無しのウとカになっている。また、約2000㎡近くの中庭をもつ事例no. 20は通り抜け可で制御有りの夜間制御である。大規模になることで公共性が高く、制御には限界があると考えられる。また、30㎡前後の小規模な中庭をもつ事例はno. 39、54、61、63であるが、それぞれキ、ケ、サ、シタイプであった。キ、ケ、サの事例は常時制御されるようになっている。また、これらの4事例はいずれもKBである。

4.3. 僧院建物の囲み形状別の空間構成タイプとその特性

現地調査からは各事例における制御の時間帯についても聞き取ることができた。夜だけ閉鎖される場合と常に閉鎖され関係者のみ出

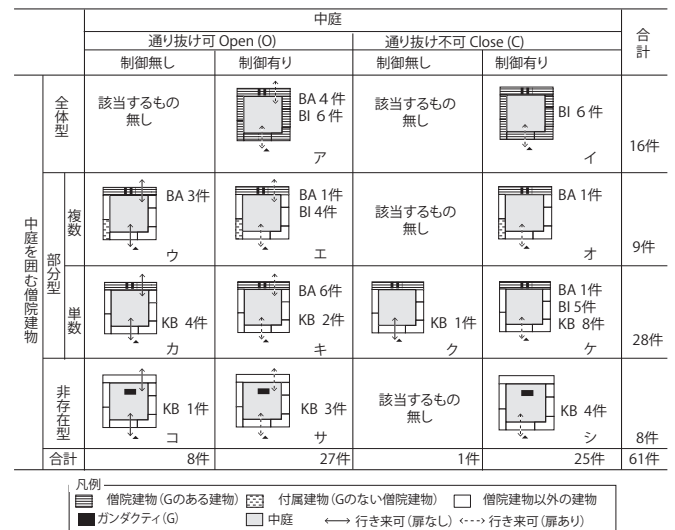


図8 中庭型集住体バハ・バヒの類型化

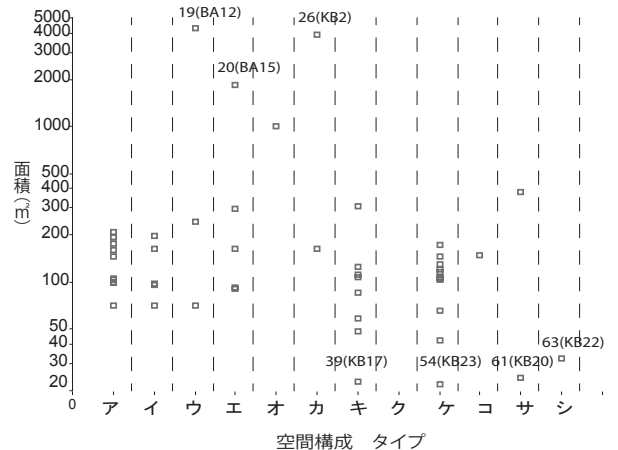
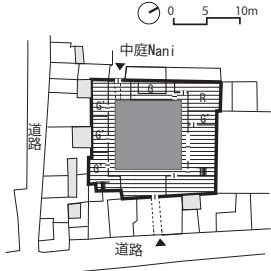
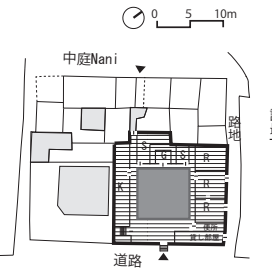
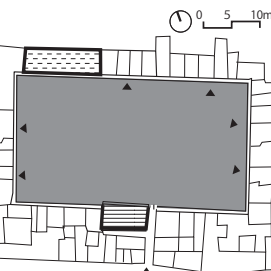
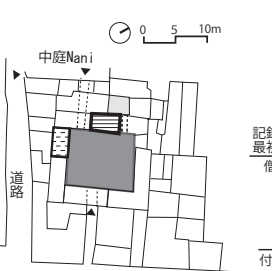
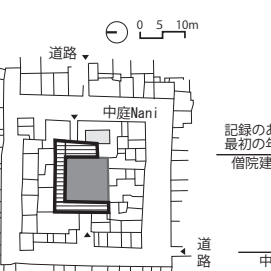
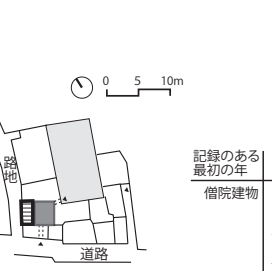
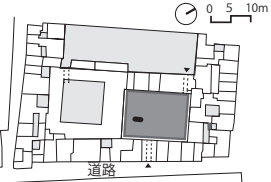


図9 中庭型集住体バハ・バヒの空間構成タイプと中庭の広さ関係

全体型	ア BA1: Kwa Baha  BA 1の中庭 記録のある最初の年 N.S. 165 (西暦1044 or 1045) 僧院建物 2階建て 1F・神室(ガンダクティ G) ・G空間の管理者用の居住場 R ・他の全室も神室(Gとは異なるもの) 2F・神室(アガム A)および 集会室(宗教行事用 D) 中庭 通り抜け可 夜8時頃～朝4時頃まで出入口を閉鎖	ア BI 14: Pintu Bahi  BI 14 航空写真 記録のある最初の年 N.S. 511 (西暦1390 or 1391) 僧院建物 2階建て 1F・神室(ガンダクティ G) ・貸し部屋 R ・多目的空間(収納 S、厨房 K) 2F・神室(アガム A)および 集会室(宗教行事用 D) 中庭 通り抜け可 巡拝の時間朝6時頃～朝9時までのみ 出入口を開放。
部分型・複数	エ BA15: Bu Baha  BA 15の中庭 記録のある最初の年 N.S. 547 (西暦1426 or 1427) 僧院建物 4階建て 1F・神室(ガンダクティ G) 2F以上 空き室 付属建物 3階建て 1F・厨房、小図書館、多目的室 2F・神室(アガム)、集会室(宗教行事用) 3F・多目的室 中庭 通り抜け可 夜9時頃～朝6時頃まで出入口を閉鎖	エ BI 17: Dhapaga Bahi  BI 17の中庭 記録のある最初の年 N.S. 795 (西暦1674 or 1675) 僧院建物 3階建て 1F・神室(ガンダクティ G) ・収納 S 2F・神室(アガム)、集会室(宗教行事用) 3F・収納 S 付属建物 2階建て 1F・多目的室 2F・多目的室 中庭 通り抜け可 夜8時頃～朝4時頃まで出入口を閉める
部分型・単数	キ BA 6: Su Baha  BA 6の中庭 記録のある最初の年 N.S. 262 (西暦1141 or 1142) 僧院建物 2階建て 1F・神室(ガンダクティ G) ・神室(アガム A)および ・集会室(宗教行事用 D空間) 2F・多目的室 中庭 通り抜け可 ・同中庭に僧院建物以外に3軒の住宅があるが、外側の 中庭からアクセスできるため、当中庭は朝・夕方 の参拝時だけ開放される。	キ KB 17: Bahacha  KB 17の中庭 記録のある最初の年 N.S. 779 (西暦1658 or 1659) 僧院建物 3階建て 1F・神室(ガンダクティ G) 2F・神室(アガム A)および ・集会室(宗教行事用 D空間) 3F・多目的室 中庭 通り抜け可 ・中庭には1軒の住宅のみがアクセスに利用する ため個人的なもので、参拝時も関係者のみ出入りする。
非存在型	サ KB 5: Sasu Nani  記録のある最初の年 N.S. 845 (西暦1724 or 1725) 中庭 通り抜け可 ・出入口には3/4年前からフェンスの扉をつけており、 夜9時頃～朝6時頃までは閉鎖ようになっている。	KB 5の祠  KB 5の中庭 

凡例  僧院建物 (Gのある建物)  付属建物 (Gのない僧院建物)  僧院建物以外の建物  ガンダクティ (G)  バハ・バヒ中庭  その他の中庭

図10 中庭への通りぬけ可で、制御有り事例にみるタイプ別の空間特性
(ネパール国政、Dep. of Surveyから入手した1:500の地図に、現地調査の結果を踏まえて筆者が作成)

入りできる場合があり、それぞれ夜間制御と常時制御として表1の制御有無の列に示した。本節ではこの結果も踏まえて、各僧院建物の囲み形状別の空間特性について分析する。

4.3.1. 中庭を囲む建物全体が僧院建物である「全体型」

タイプアとイはどちらも中庭を囲む建物全体が僧院建物である全体型で、制御有りのタイプである。イは通り抜け不可であり、3.1. で見た原型に近いバハ・バヒと同じ空間構成である。イが6件に対し、アが10件であり、通り抜けられるものの方が多いことが分かった。

また、イの場合は常時制御される事例が多いのに対し、アの場合は夜間制御が多く、日中は自由に通り抜けられるようになっている。

4.3.2. 中庭を囲む建物の一部が僧院建物である「部分型」

中庭を囲む建物の一部が僧院建物である部分型には、僧院建物が1軒だけの部分型・単数と、別に付属建物もある場合の部分型・複数がある。タイプウ～オが部分型・複数である。通り抜け可のウとエが8件あるのに対し、通り抜け不可のオは1件のみだった。また、制御有りはエの5件とオの1件であるが、すべて夜間制御だった。

タイプカ〜ケが部分型・単数で、合計 28 件あり、もっとも多くの事例が含まれる類型である。通り抜け可が 13 件、不可は 14 件とほぼ同じ件数になっているが、制御無しが 5 件に対して、制御有りは 22 件と多くを占めている。通り抜け不可で制御有りのケが 14 件と最も多い。制御有りのキとケどちらにおいても夜間制御が多くみられる。

僧院建物以外の建物は一般住宅が多く、僧院の中庭としての利用と居住者による利用の両方があるため、通り抜けの可否に関わらず、昼は誰でも利用できるようになっていると考えられる。

一方、夜間制御は、僧院の仏像など備品の盗難を予防することを目的とし、以前は主に全体型の主僧院（BA, BI）のみで行われていた。今回の調査では、部分型や非存在型でも多く見られ、その原因として都市化による流入人口の増加による居住空間としての防犯の目的があることを聞き取り調査から把握できた。

4.3.3. 中庭を囲む建物に僧院建物が存在しない「非存在型」

タイプコ〜シは非存在型で、通り抜け可であるコ、サが 4 件、不可のシ 4 件であり、制御無しのコは 1 件のみであった。サが 3 件で、シが 4 件である。また、制御の時間は、サの 3 件全てが夜間制御であり、シ 4 件全てが常時制御になっている。特にシの場合 1 軒あるいは 2 軒の住宅で囲まれた小規模な中庭であるため、個人的な中庭として利用されている。非存在型コ〜シの 8 件は全て副僧院である KB であった。僧院としての利用よりも住宅としての利用が中心であり、それに応じた制御が行われていると考えられる。

4.4. 通り抜け可かつ制御有りの事例の制御の実態

通り抜けが可で制御有りという、市街地との連続がありながら、一定の制御が存在する事例に対して追加的な聞き取り調査を行い、空間利用と制御の関係について検討を行う。

4.4.1. 中庭を囲む建物全体が僧院建物である事例（ア）

事例 BA1 はカトマンズ盆地の中でもっとも伝統的儀式を継承していると言われる僧院である。1 階にガンダクティ（G）とそれ以外に複数の神を祀る空間があるほか、G の管理者^{注 39)}の寝泊りする空間も設けられている。2 階にも様々な神を祀っているほか、宗教儀式後の集会や食事会ができるディギ（D）を設けている。一方、正面は道路に面し、背面に別の広い中庭がある。特に 1 つの僧院に多数の神を祀っていることや隣接する中庭にも僧院があるため、毎日通り抜けを利用して巡拝に来る人々が多く、出入り口は巡拝のため朝 4 時から夜 7 時ごろまで開放されている。

事例 BI14 は、G と 2 階の密教神室（A）以外の空間が D になっており、1 階の一部は貸し部屋に利用され僧院の収入源にもなっている。2 階のほかの多目的部分は地域活動に利用できるようにしている。裏口からは別の中庭に通り抜けられるようになっており、毎日の参拝時間である朝と夕方は開放されている。それ以外の時間はサンガ構成員および関係者のみが出入りできる。以上の二つの事例はどちらも僧院への参拝者の利用に応じた制御が行われているといえる。

4.4.2. 中庭を囲む建物の一部が僧院建物である事例（エとキ）

事例 BA15 は中庭と僧院建物、附属建物、住宅によって構成されている。僧院建物には G があり、それ以外の部屋は使われていない。その代わりに、附属建物に A と D が設けられている。D はサンガが宗教空間としてのみ利用するのではなく、図書館や地域団体が集会所としても利用できるようになっている。BA15 の中庭は規模が大きく、6 箇所から複数の小中庭を通じて、通り抜けられるようになってい

る。また、夜 9 時から朝 6 時まで、中庭のすべての出入り口を施錠するようにしており、施錠は居住する世帯毎の当番制になっている。

事例 BI17 は僧院建物の G と多目的室からなる附属建物を残し、その他は個人住宅と上座仏教の建物となった例である。僧院建物はサンガ構成員だけが利用するようになっている。それに対して、附属建物は婦人会や小規模金融グループ（Sahakari）の打ち合わせに利用するなど地域活動にも利用されている。また、中庭からは二方向の中庭につながり、一箇所は通り抜けができるようになっている。また、夜間の出入り口の施錠は前例と同様に居住世帯が行うようになっている。

事例 BA6 は中庭を囲む 4 辺のうち 1 辺が住宅になっており、部分的に僧院建物が住宅化したと考えられる。僧院建物には G のほかに、A、D が 1 階にあり、2 階は多目的室となっている。住宅には外側からアクセスできるため、中庭は毎日の参拝の時間のみの開放されている。

事例 KB17 も 3 軒の住宅と僧院建物によって構成されるが、住宅のうち 2 軒は道路側からアクセスできるため、1 軒の住宅の個人的な中庭のようになっている。また、毎日の参拝もその居住者のみが行っており、中庭と僧院建物に入るためには居住者を尋ねる必要がある。

4.4.3. 中庭を囲む建物に僧院建物が存在しない事例（サ）

事例 KB5 は中規模の中庭で、住宅と一部隣接のムーパハの建物で囲まれている。この事例の G は、釈迦の像が置かれた祠であり、中庭の南西に位置している。G の周年祭以外の儀式は行われない。毎日の参拝は中庭の居住者が行うが、義務的なものではない。中庭は通り抜けできるようになっているが、近年はフェンスの扉を設置し、夜間は閉鎖されるようになっている。

5. 結論

本稿では仏教僧院を起源とする中庭型集住体バハ・バヒの空間特性を明らかにした。まず、歴史的背景からバハ・バヒの変遷について以下のように整理した。バハ・バヒは 8 ～ 12 世紀には学問中心の出家僧侶の居住の場であったが、13 ～ 15 世紀に儀式中心の在家僧侶の居住の場に変化した。16 ～ 18 世紀には儀式中心の在家僧侶の居住の場に加えて、僧侶に限定せず個人が信仰を表す場としての機能をもつようになる。一方で、出家僧侶の居住の場だったバハ・バヒは地域空間としての機能をもつようになる。19 世紀以降は新たに発展を遂げた、学問中心で出家僧侶からなる上座仏教やチベット仏教の影響を受けて、学問中心の空間が部分的に設けられる。さらに、一般市民の居住の場から、近代化とともにバハ・バヒ所有の居住空間が一部で私有化される。また商業空間として利用されるものや、放置され老朽化するものも見られるようになる。このような変遷を経たことによって現存するバハ・バヒはもともとの僧院空間とは大きく異なる特徴を備えた、旧市街地に定着した生活空間になっている。

次に、バハ・バヒにおける中庭を囲む僧院建物の囲み形状、中庭の通り抜け可否、および制御有無の視点からバハ・バヒの類型化を行い、12 タイプの空間構成が確認され、その特性が明らかになった。①中庭を囲む仏教僧院の囲み形状から、全体型、部分型・複数、部分型・単数、非存在型の 4 つに大別し、さらに、中庭の通り抜け可否と、出入り口の制御の有無によって 12 タイプに分類することができた。これにより、主僧院（BA と BI）でも全体型は半数以下（37 件

中 16 件）であることが把握できた。主僧院以外に旧市街地には 115 件の副僧院（KB）が存在するが、全体型のものが少ないと推測することができ、旧市街地の多くのバハ・バヒは住宅が混在する部分型や非存在型の中庭型集住体バハ・バヒであると考えられる。

②通り抜けができない、すなわち仏教僧院という施設として独立した事例よりも、通り抜けができる、すなわち市街地との連続性を持つ事例が多いことが確認できた。また、通り抜けできるものでも、時間帯によっては出入りに制御が行われており、利用に応じた共同的な管理が行われていることが把握できた。

③個別の詳細調査により空間利用と制御の実態を把握した。全体型の場合は儀式中心の空間としてサンガによる制御が行われ、部分型の場合は、儀式空間に加えて生活空間でもあり、居住者による制御が行われ、非存在型では、儀式空間ではなく、生活空間としての居住者による制御が行われることが分かった。

④部分型であっても住宅が中庭側の入り口を使わない場合は、儀式空間としてサンガが制御を行うことが分かった。また、部分型で小規模の中庭の場合、中庭側に入り口をもつ世帯が限られるため、個人の生活空間として居住者が制御を行うことも見られた。

⑤制御については、近年、僧院の仏像や備品の盗難予防という目的だけではなく、生活空間としての防犯を目的に夜間閉鎖する傾向が強まっているといえる。

以上、仏教僧院を起源とする中庭型集住体の変遷と現存する中庭型集住体バハ・バヒの空間構成の類型化を行い、その特性を明らかにした。これにより仏教の僧院としての空間と、市街地の居住空間の一部としての空間が混在している状況が具体的に明らかとなった。両者の重なり度合は事例ごとに異なっており、今後の共同的空間管理システムを検討する上でも、各特性に応じたシステムの検討が求められる。

謝辞

本研究は科学研究費補助金（平成 21 ～ 22 年度特別研究員奨励費、研究課題名：ネパール伝統市街地における高齢者居住支援のための重層的生活圏マネジメント、研究代表者：サキヤラタ）により実施された研究である。現地調査には Tribhuvan University, Dep. of Buddhist Studies の講師 Manik Ratna Shakya 氏、Lotus Research Center の Dr. Manik Ratna Bajracharya 氏、その他に多くの現地協力者から多大な協力をいただいた。ここに記して謝意を表する。

注

- 注1) カトマンズ盆地の都市人口は2001年現在995,966人であり、盆地全体の60%を占め、毎年5.22%の比率で増加している（文献1参照）。
- 注2) 中世期に三つの小国であったカトマンズ、パタン、バクタブルは、それぞれに市壁をもつ独立した都市を形成していた。その範囲を現在、それぞれの都市の旧市街地とし、都市計画が行われている（文献2,3参照）。
- 注3) カトマンズ盆地、特にパタンは8～13世紀にチベットからの学生とインドからの指導者が集まる仏教学の教育拠点であり、Vast University City として発展してきたとされる（文献4,5,6を参照）。また、仏教僧院、仏塔、密教との関連が深い社会行事などはヒンズー教との間の紛争がありながらも一定の仏教都市として発展してきたまちを象徴しているといわれる（文献6のp. 270参照）。
- 注4) 仏教僧院の典型的建築様式については文献7のpp. 25-37を参照。
- 注5) 積層型住宅とは4～5階建ての住宅で、ネワールの住様式が含まれるものである。ネワールの住様式とは、住宅の広さに関係なく、階層ごとに1階はトイレ・収納、2階は寝室・接客室、3階は仕事場、4階が台所、食事室、お祈り室と決められている点が特徴である。近代化により構造や外観には変化がみられるが、この住様式が継承されている（文献7,8,9参照）。
- 注6) 王宮建築の関連は文献10と11、裕福な人々の邸宅との関連は文献8を参照。
- 注7) 文献12を参照。
- 注8) 文献13を参照。
- 注9) サンガ(Sangha)とは修行を受けた出家僧侶からなる仏教僧院の運営組織である。現在出家僧侶は存在しないが、修行する慣習が残されており、サンガに入会することで僧院の共同管理だけではなく、社会儀式（結婚、葬

儀など）の運営にも関与するようになっている。グティ(Guthi)とは公共物の保護または宗教的儀式や社会活動を持続的に実行できるよう土地や現金などの土地や現金などの資産を共同で保有し、管理者として特定の家系を構成員として任命する運営組織および、それに関する制度である。グティはカーストごとに複数存在する。サンガの主体は僧侶層であり、サンガの中には儀式ごとに複数のグティが存在する（文献14のpp. 231-250を参照）。

注10) カトマンズ旧市街地の中心部ではバハ・バヒが雑貨店やレストランに転用されたり、中庭空間が駐車場とされることも多く、歴史的な仏教僧院であることを知らない人も少なくない。文献15ではその変わり果てた姿が報告されている。

注11) 文献7では建築様式からバハ・バヒを3種類（①バハ、②バヒ、③バハとバヒの両様相が含まれるバハバヒ）に分類しているが、本研究では、僧院の運営や儀式の行いに関わる仏教僧院の概念、及び現地で広く知られる考え方を踏まえ、バハ・バヒをバハあるいはバヒの2種類で捉える。

注12) チャイティアとは一般的にストウパ(Stupa)と訳され、現地では大塔から小塔まで多様なものがあり、カトマンズ盆地には1800のチャイティアが存在する（文献16参照）。

注13) 中庭には小規模で、共同のゴミ捨て場としての機能をもつ「サガ(Saga)」と呼ばれるものもあるが、近年都市部では共同のゴミ捨て場の必要がなくなったことで、サガと呼ばず、一般の中庭と同様にツカと呼ばれるようになっている。ただ、盆地内のネワール族の農村集落にはまだサガが存在する（文献17のp. 87には中庭や広場について示してあるが、サガをゴミ捨て場としている。）

注14) 各旧市街地のバハ・バヒの数は文献18に基づいている。また、旧市街地範囲から離れて位置するバハ・バヒもあるが、バハ・バヒの運営や儀式においては総括的に扱われており、旧市街地範囲外のバハ・バヒも対象にすることが望ましいと考える。

注15) 文献23ではインドのAjanta洞窟やTaxashilaのViharaが例示されている。

注16) チャバヒは現在もカトマンズに位置するが、それは1654年に建設されたものを建て替えたものと言われている。文献10にチャバヒの建築様式について説明している。

注17) 文献30のp. 18と文献32を参照。

注18) 文献31のp. 385を参照。

注19) 文献30のp. 20を参照。

注20) 文献31のp. 386に、13世紀から本は読むのではなく、拝むものになり、勉強よりも実践的なTantrismが主流だったと記載されている。

注21) 文献30のp. 22を参照。

注22) チュダカルマ(Chudakarma)とは1440年から始められた（文33参照）、サキヤやバジュラチャルヤ僧侶の男児が5～12歳以内に4日間の僧侶生活を送る、儀式的な修行式のことである。この儀式を受けることにより、それぞれサキヤあるいはバジュラチャルヤ僧侶となり、サンガの構成員となる。

注23) 1448年になくなった僧侶が最後の出家僧侶であることを文献33のp. 139に記載されていることから、15世紀末にはネワール仏教が定着していたと考えられる。

注24) システム化は17世紀のSiddhi Narshinga Malla王朝により行われたとされる（文献30, 31, 33を参照）。

注25) 文献33のpp. 142-147に説明されている。

注26) 現在も部分的に居住の場として利用しながら仏教学校や一般小学校として利用しているものも多数ある。バヒの僧侶層はバハの僧侶層より経済的に弱い立場にあり、また、出家僧侶としての歴史があっただけに在家僧侶生活への移転が困難であったことを記載されている（文献18のpp. 185-188を参照）。

注27) 文献30のp. 24を参照。なお、新しい職とは鑄造仏像作り、占星家などであり、この職につく人々は現在もサキヤやバジュラチャルヤが過半数を占める。

注28) 文献22のpp. 135-178において、カチャバハが時代の変化とともに現れたバハ・バヒの一種で、一般市民の住居の一部であることを記載されている。

注29) チベット仏教の僧侶たちは中世期からカトマンズ盆地のバハ・バヒを訪れ、バハ・バヒの僧侶たちと関係を持っていたが、ネワール人がチベット仏教の出家僧侶になったのはこの時が初めてであるとされる（文献30のp. 33参照）。また、チベット仏教の僧院グンバはネパールのヒマラヤ地帯においては盛んで、チベットからの難民によってカトマンズでも広まることになる。現在盆地内には130件のグンバが存在する（文献34参照）。また、バハ・バヒの一室をグンバと名づけて、密教の本などを備え、学問の部屋あるいは図書館のように利用するものも多い（現地調査より）。

注30) 文献31のp. 316を参照。

注31) ムーバヒは元々出家僧侶の居住の場であったため、バハに比べ個人住宅化することは少なく、出家僧侶からなる上座仏教のビハルとして利用されているところが多くみられる（現地調査より）。

注32) 文献33のp. 145を参照。

注33) 2010年現在カトマンズ盆地内には41件のビハルが存在する（文献35参照）。

注34) バハ・バヒの所有権に関する事業はパタンのバハ・バヒの保全に大きな役割を果たしたといわれる。この事業に関する内容は当時パタン市長を10年務め、Society of Buddhist Monasteriesの設立から20年以上会長を務めていた方への聞き取り調査に基づいて記載している。

注35) バハ・バヒを建設するための手法は12世紀頃にすでに”Kriyasangraha-panjika”として発達していたとされ、文献36にはその詳細な内容が含まれている。ネパールの現存するバハ・バヒはそれに含まれる”Sutrapatana Bidhi”による手法で建てられているといわれる（文献23, pp. 55-74参照）。また、バハ様式やバヒ様式を区別するような建築様式はおそらく中世期後半のバハ・バヒのシステム化によって進化したと考えられている（文献22のp159参照）。しかし、基本的に四角形の中庭を囲んで建物を建て、正面から中心のところは釈迦のいる空間として”ガンダクティ”を設け、ガンダクティに向けて他の僧侶の部屋を設ける手法はバハとバヒ両方とも同じである（文献23, pp. 70-74参照）。

注36) 文献7のpp. 28-33に典型的バハ・バヒとして紹介されている。

注37) 文献18にはカトマンズ盆地に存在するすべてのバハ・バヒの形態について記載されているが、主に本文の3種類が示されている。

注38) パタン旧市街地の16件のムーバハと21件のムーバヒについては文献20を参照。

注39) 管理者とはこのムーバハで修行を受け、サンガ構成員になった男子のことで、1ヶ月毎の交替制で住み込みで管理を行う（文献14参照）。

参考文献

- 1) Dr. Pitamber Sharma: Urbanization and Development, National Planning Commission Secretariat, CBS, 2002
- 2) Kathmandu Upatyaka Bhitarka Nagarapalika ra Nagaromukha Ga.Bi.Sa.harumaa Garine Nirman Sambandhi Maapdanda, Kathmandu Upatyaka Nagar Bikas Samiti, Ministry of Physical Planning & Works, Government of Nepal, 2008 (B.S. 2064)
- 3) Department of Archeology & UNESCO: KVWHS Management Handbook for Patan Durbar Square Monument Zone, 2007
- 4) Min Bahadur Shakya: Hiranyavarna Mahavihara, A Unique Newar Buddhist Monastery, Nagarjun Publication Pvt. Ltd, Kathmandu, 2004
- 5) Min Bahadur Shakya: Monasticism in Newar Buddhism, A Historical Analysis, A Conference on Buddhist Heritage of Nepal Mandal-1998, Lotus Research Center, Nepal
- 6) Mary Shepherd Slusser: Nepal Mandala (A cultural Study of the Kathmandu Valley) (2 Vols), Princeton University Press, New Jersey, 1982
- 7) Wolfgang Korn: Traditional Architecture of the Kathmandu Valley, Ratna Pustak Bhandar, Kathmandu, 1986
- 8) Giovanni Scheibler: Building Today in a Historical Context, Bhaktapur Nepal, 1982
- 9) サキャラタ、上野勝代、藤本尚久：ネパールの都市部における高齢者居住空間の新旧住宅街類型間比較、住宅系研究論文報告会論文集, 1 pp. 131~140, 2006
- 10) 波多野純：ネパールにおける仏教僧院平面の変遷と王宮建築、仏教芸術 152、pp. 88~103, 1984
- 11) 黒津高行、渡辺勝彦：チョク建築の構造、ネパールの王宮における中庭建築の研究その1、日本建築学会計画系論文報告集, 第480号, pp. 104~109, 1990. 2
- 12) Mohan Pant & Shuji Funo: Stup & Swastik, Historical Urban Planning Principles in

Nepal's Kathmandu Valley, Kyoto University Press, 2007

- 13) Local-self Governance Act 1999
- 14) David Gellner: Monk, Householder, and Tantric Priest, Newar Buddhism and its Hierarchy of Ritual, Cambridge University Press, 1993
- 15) Sacheen Maharjan, et al.: Musya Bahal, A Monastery Losing its Identity, Vaastu, an Annual Journal of Architecture, 2005
- 16) Niels Gutschow: The Nepalese Chaitya-1500years of Buddhist Votive Architecture in the Kathmandu Valley-, Axel Menges, Stuttgart, London, 1997
- 17) Niels Gutschow, Bernhard Kolver, Ishwaranand Shresthacarya: Newar Towns and Buildings, An Illustrated Dictionary, Newari-English, VGH Wissenschaftsverlag, Sankt Augustin, 1987
- 18) John Kerr Lock: Buddhist Monasteries of Nepal, A Survey of the Bahas and Bahis of the Kathmandu Valley, Sahayogi Press Pvt. Ltd., Kathmandu, 1985
- 19) Hem Raj Shakya: Achheshwor Mahavihar Pucho, Boudha Vihar Sangha, Lalitpur, 1990
- 20) Hera Kaji Bajracharya: Lalitpur Buddha Vihara, Boudha Vihar Sangha, Lalitpur, 2000
- 21) Min Bahadur Shakya: A Study of Traditional Vajrayana Buddhism of Nepal, "Newa Buddhist Culture Preservation seminar" in 1993, Lotus Research Center, Nepal
- 22) David Gellner: The Anthropology of Buddhism & Hinduism Weberian Themes, Oxford University Press, New Delhi, 2003
- 23) Manik Ratna Shakya: Vihar Architecture of Nepal Mandala, Master Thesis, Department of Buddhist Studies, Tribhuvan University, Nepal, 2006
- 24) Dr. Carl Pruscha (Government of Nepal with the United Nations and UNESCO): Kathmandu Valley, Preservation of Physical Environment and Cultural Heritage A protective Inventory vol 2, Anton Schroll & Co., Vienna, 1975
- 25) 日本工業大学ネパール王国古王宮調査団：ネパールの仏教僧院, 中央公論美術出版 1998
- 26) 石井淳：ヒマラヤの「正倉院」カトマンズ盆地の今, 山川出版社, 2003
- 27) Prayag Raj Sharma: Kul, Bhumi ra Rajya, Kathmandu, 1977
- 28) Mohan Pant and Shuji Funo: Spatial Structure of a Buddhist Monastery Quarter of the City of Patan, Kathmandu Valley, J. Archit. Plann. Environ. Eng., AIJ, No.513, pp.183-189, 1998.11
- 29) Siddhi Bahadur Bajracharya: Role of Art and Architecture in Harmonious Cities, Sahari Bikasa, Six Monthly Bulletin, Department of Urban Development & Building Construction, Ministry of Physical Planning and Works, 2008
- 30) 田中公明、吉崎和美：ネパール仏教、春秋社、1998
- 31) Dr. Khadga Man Shrestha: History of Buddhism in Nepal upto 1956 with special Reference to Vajrayana Buddhism, Kathmandu, 2008
- 32) Dr. Bhadra Ratna Bajracharya: Buddhism and Lichhab Society, a Conference on Buddhist Heritage of Nepal Mandal-1998, Lotus Research Center, Nepal
- 33) David Gellner: A Sketch of the History of Patan with Special Reference to Buddhism, Contributions to Nepalese Studies, Vol 23, No.1, 1996
- 34) Government of Nepal, Ministry of Local Development, Buddhist Philosophy Promotion and Monastery Development Committee: Baudha Darshan Prawardan Tatha Gumba Vikas Samiti Smarika-9, 2010 (B.S. 2067)
- 35) ウェブサイト (Lumbini Nepalese Buddha Dharma Society (UK), Charity Registration 1116370) に掲載された記事 Venerable Sujana. "Theravada Buddhism in Modern Nepal". Lumbini Nepalese Buddha Dharma Society (UK), Charity Registration 1116370. http://www.lumbini.org.uk/bd_n_thera_t.html (参照 2010.05.20)
- 36) Tanemura Tyugen: Kuladatta's Kriyasamgraha Panjika, Egbert Forsten, Groningen, The Netherlands, 2004

(2011年1月10日原稿受理, 2011年7月6日採用決定)